

会 議 録

1 会議名

令和5年度上越市小林古径記念美術館運営委員会

2 議題（公開・非公開の別）

[報告事項]

- (1) 令和5年度の事業の経過報告（公開）
- (2) 令和6年度の事業内容について（公開）
- (3) 今後の美術館の運営について（公開）

3 開催日時

令和6年度3月5日（火） 午後1時30分から

4 開催場所

小林古径邸画室

5 傍聴人の数

0人

6 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

- ・ 委 員：高橋信雄、五十嵐史帆、大塚啓、川崎日香湊、宮越啓子
- ・ 事務局：笹川統括学芸員、市川主任学芸員、伊藤学芸員、小川学芸員

7 発言の内容

（あいさつ）

（市川主任学芸員）：開会にあたり、笹川統括学芸員からあいさつを申し上げる。

（笹川統括学芸員）：お集まりいただき感謝申し上げます。本日欠席の宮崎館長からメッセージを預かっているので、代読する。

「運営委員会に館長が欠席すること、深くお詫び申し上げます。能登半島地震で妻の実家が被災した。両親は無事だが、家屋の破損や、水道、電気の不通が1か月以上続いた。この度家屋の修繕が出来ることとなり、立ち合いのため週末まで能登町に滞在する。美術館の運営に対する貴重なご意見をお聞きできないことを申し訳なく思う。委員の皆様におかれましては美術館の未来のために忌憚のないご意見を頂戴賜るようお願い申し上げます」

（市川主任学芸員）：今年度から2年間の任期で委員が変わっている。委員の皆様の自己紹介をお願いしたい。委員に次いで事務局も自己紹介申し上げます。

（名簿順に委員自己紹介）

（事務局自己紹介）

（市川主任学芸員）：それでは、事務局で進行させていただく。

(1) 報告事項「令和5年度の事業の経過報告」（公開）

（笹川統括学芸員が資料にもとづき説明）

（川崎委員）：全損した作品はどうなるのか。

（笹川統括学芸員）：今は破損したものの部品を全て保管しているが、最終的には廃棄することになる。テラコッタ作品が粉々になっている状態。復元は難しい。

（川崎委員）：一部が破損した市民プラザの作品は修復の予定はあるか。

（笹川統括学芸員）：作者と連絡を取りあい、すでに修復済みである。

（宮越委員）：今回の地震、作品の被害を受けて、地震対応で何か改善したことはあるか。

（笹川統括学芸員）：まちかど交流館の彫刻作品については、不安定なものは作品を入れ替えるなどした。収蔵庫内も一度総点検し、絵画ラックの作品が揺れないようになおしたり、さらしで額の下部分をおさえたりした。今展示している作品については平面が多い。美術館自体も震度5強でもあまり揺れがなかった。展示室に展示している作品については、できる限りのことはしている。

（高橋委員）：入場者数の減少について、説明の中で「近代日本美術の人气が低迷している傾向がみられる」という話があった。それは確かにあると思う。しかし日本にある多くの美術館が全て同じ傾向だとも思えない。単純な理由をつけられない方がいい。一つの傾向としてあるだけであって、すべての人が古径に興味をもっているとも思えないし、その中で古径美術館をつくっている。「傾向」を理由にするのはいかなものか。去年の5月からコロナが5類に移行して、いろんなことを調べている。コロナ前の2019年と、どれくらい人流が戻っているのか、データが取れる範囲で比較している。（上越インターを通過する車の台数や電車の降車した人数など）今年と2019年と比べると、半年強の期間だったこともあって、やはり完全に戻ってきてはいない。戻りつつあるが、完全ではない。理由は様々だが、人流が落ちていることは事実。制約されていた移動、行動の余韻が残っている。もしくは価値観が変わってしまったのか。新たな興味、刺激がないと戻ってこないのではないかと議論されている。美術館だけではなく、様々なところで同じことが起こっている。分析は必要だが、見せ方・楽しませ方の研究・追及が必要。旧態依然としたままではいけない。パブリックな美術館なので民間ではできない、上越ならではの象徴を発信していく使命がある。入館者数にこだわりすぎないこと。「何をやったか」「何をしていたか」が重要である。美術館の存在感をどうやって上げていくか。芯をしっかり持ってもらえば。今年度の入館者数を見ると、有料と無料の割合が半々くらい。それでいいのではないか。そう考えると、今年度はよかったのではないか。どんどん意欲的な企画を挑戦して欲しい。皆さん学芸員のやりがいでもあるだろう。

（笹川統括学芸員）：まずは美術館に関心・興味をもってもらうところからだと思っている。

（高橋委員）：ただ絵を見るだけだと思うと、関心のない人は本当にこない。自由にできるところからやればいい。柔軟性が必要。

（高橋委員）：今の人たちの絵に対する興味・関心はどう変わっているのか。まったく近代美術、絵画には興味がないのか。

（笹川統括学芸員）：今は江戸時代の絵に興味をもっている人が多くなってきている。

- (高橋委員)：漫画的な表現が好まれているのかもしれない。ただこれは一つの傾向であって、時代によって変わるものだろう。
- (笹川統括学芸員)：そうだが、段々傾向が顕著になってきている。一方で、今、展示している古径の素描作品展に関し、開館以降初めて、多数の素描作品を展示する機会となった。アンケートでも「初めてこんな量の素描を見た」「素敵な作品をたくさん見ることが出来てよかった」と好評である。自分たちが持っている所蔵品を自信をもって展示していくことが重要で、見せ方の手段としていろいろな手立てがあると考えている。
- (高橋委員)：発想・企画することで予算が付く。今上越市は外から人を呼ぼうとしているが、ぜひこの美術館が人を呼ぶ拠点となってほしい。
- (大塚委員)：上越タイムスの連載も、各展覧会時に読んでいた。こうした記事を読むことで、「行ってみよう」と感じる人もいるだろう。実際に教員の研修会で美術館を利用させてもらったときに、我々のための展示の解説を、他のお客さんも耳を傾けていた。話を聞きながら、その場ですぐに質問もできる、これはこの美術館の良さだと感じている。入館者数だけでははかれない、横にいる学芸員に気軽に質問できる空間がいい。
- (高橋委員)：団体見学一覧表をおもしろいデータだと思ってみていた。いろんなところから見学に来ている。作品に触れる、説明を聞く、好きなら毎日来てもいい、それがこの美術館である。美術館で催しをしている時に、「あなた、美術館に行かないとだめだよ」という雰囲気をつくってしまう。そういう発信の仕方が必要。それが外から人を呼び込むことにもつながる。
- (五十嵐委員)：団体見学受付表を見ていると、本当にいろんなところから人が来ているが、中高年が多いのではないか。歴史博物館の昔のくらし展のような、小学生、子どもを連れてくる施策を打ってほしい。大学の新入生研修で、学生を高田に連れてこようとしている。いつもは春日山にいったうみがたりについて、おしまい。はじめて高田に行こうとなったが、事務局が出してきた最初のプランは「附属小、附属中、学教センター、三重櫓」だった。「高田城址公園の中には歴史博物館、美術館があって、今後学生が使う可能性がある」ということを伝えていかないといけない。本当は中に入れれば一番いいが、時間の関係もある。近隣の学校に毎年来てもらうこと、まずは来てもらうことが重要ではないか。
- (笹川統括学芸員)：私たちの発信不足も大いにあると考えている。近隣には高校がたくさんあるが、入館料がかかるのがネックになっているようだ。
- (五十嵐委員)：招待券など、配れないのか。
- (笹川統括学芸員)：入館料を払って入ってもらっている。できれば高校生までは無料にできれば呼びやすいと思っている。文教経済委員会でも話題が出ている。
- (川崎委員)：高校生は芸術が選択授業になってしまうので、なかなか美術という教科自体が遠くなってってしまう。
- (笹川統括学芸員)：授業で入館する際には入館料が発生してしまう。働いていない高校生からも料金を取ることにについて、文教経済委員会の中でも議論があった。できれば近くにいる子どもたち、小学生、中学生、高校生、歩いてきてもらうような

働きかけも必要だと感じている。

(大塚委員)：城東中学校など、近くにあるのはうらやましい。

(川崎委員)：美術部招待デーなど用意するのはどうか。

(大塚委員)：部活で一度来て、いいなと思ったら今度は休みの日に自分で行くようになる。

(高橋委員)：美術部というのは、部員が多いほうなのか。

(大塚委員)：それなりに間口の広い部活である。運動が苦手、でも何かやりたいという子は美術部に来ることが多い。

(川崎委員)：高田高校、直江津中等の文化祭を見に行ったら、美術部の作品もそれなりの点数発表されていた。日本画などいろんなことをしている。

(川崎委員)：入館者の中の外国人の割合はわかるか。

(笹川統括学芸員)：調べきれていない。体感としては、冬場に外国人観光客が増えてきたように感じている。

(川崎委員)：赤倉からの観光客は、朝一番のパウダースノーを滑りたくて来ている。それが終わったら暇なのだそうだ。昼間暇を持て余している外国人観光客は、美術館に来てくれるのではないか。

(笹川統括学芸員)：外国人観光客が増えてきたように我々も準備が必要だと考えている。アジア圏の人も多い。館内の表示や解説文など、対応していかなければならない。

(高橋委員)：まずは共通言語の英語でいいから、しっかりやっていく。今後も外国人観光客は増え続ける。彼らは自分たちで情報を探していきたいところに行く。

(笹川統括学芸員)：最近は翻訳アプリを使って解説を読んだりしている人もいる。翻訳をしてくれる人をお願いして、大きな展覧会の時には解説文を翻訳してもらったりしている。

(川崎委員)：庭園内の桜が咲いたところに、プロのカメラマンに写真を撮ってもらうのはどうか。写真なら国内外問わず魅力を伝えられる。いい写真を使えば、一度行ってみたいという気にさせられるのではないか。

(笹川統括学芸員)：桜の時期はまだ、他の植物が咲いておらず、また桜と古径邸などを一緒に撮影するのが難しいと思う。できるとすれば、観桜会の時期にあわせた庭園ライトアップ。景観の良さを生かして、チャレンジはできると思う。

(大塚委員)：去年の秋、生徒の引率で関西に行った。京都伏見稲荷・清水寺は9割が外国人。日本人のグループは私たちと、他の修学旅行のグループだけだった。世の中こんなになっているのかと、驚いた。外国の人は「日本らしさ」を求めて日本にやって来る。ここも写真映えするような和風建築のある施設として発信するといいかもしれない。

(川崎委員)：石川まで来ているような外国人なら、距離も関係なく、ここにも来ると思う。

(宮越委員)：外国人観光客の距離の感覚は私たちとも全く違う。東京～京都間も1日で移動・観光する。古径邸などの日本の和風建築は「紙と木でできている家はアメージング」という感覚。私たちが見慣れている風景も、新鮮に感じているようだ。見せ方の工夫次第だと感じている。本当は古径邸に泊まると面白いと思う。

(川崎委員)：古径邸の魅力を伝えられるような、「柱は一つ一つ面取りがしてある」など、説明した表示があるといい。観桜会の時、「この家に入りたい」と思っ

たときに見てもらえる。観桜会の時こそ、展覧会も、古径邸も見せなければもったいない。建築関係の人にも、SNS を使ってアプローチしてはどうか。人を呼ぶには SNS はもちろん、クチコミである。

(宮越委員)：高校の中でも建築の勉強ができる高校がある。

(高橋委員)：センスのいい発信をして、準備をしていくといい。この美術館は上越市の中で一番いいロケーションだと思っている。いろいろなお客さんを連れてきて上越市のことを紹介できる。こんな施設はなかなかない。

(笹川統括学芸員)：長野市・金沢市・上越市 3 市長の対談があったが、その撮影会場も画室だった。上越市で一番いい場所、となるとここが選びたくなるのだろう。

(高橋委員)：ここは美術館の中にあるからいい。宝の持ち腐れにならないように、ここが上越市の発信地となってほしい。

(2) 報告事項「令和 6 年度の事業内容について」(公開)

(笹川統括学芸員が資料にもとづき説明)

(高橋委員)：柴田展は 3 か月間、収蔵品だけで展示していくのか。

(笹川統括学芸員)：その予定である。

(宮越委員)：柴田氏は以前観桜会のポスターを手掛けていたこともあった。

(笹川統括学芸員)：朝日酒造の本社のステングラスや武蔵野酒造の日本酒ラベルも手掛けていた。

(大塚委員)：城北中学校の生徒玄関にもステンドグラスをデザインしてもらった。中学生をバスに乗せてステンドグラス工房まで行ったこともあった。

(笹川統括学芸員)：現在柴田長俊の作品集も作成していて、そこに市内公共施設のステングラス作品も掲載している。展示室内でもスライドショーで画像を流す予定である。

(高橋委員)：ステンドグラスは色の組み合わせ、ガラスの組み合わせでどんどん変わっていく。市内の公共施設にこれだけのステンドグラスがある市はなかなかないだろう。色の組み合わせをトレーニングのためにやっていたところもある。ステンドグラス作家ではないから、そこは丁寧に紹介してほしい。

(笹川統括学芸員)：柴田の初期の作品は熱量が感じられるような、迫力ある作品が多い。今展覧会では初期の作品も展示する。

(高橋委員)：晩年は穏やかな風景画が多い。一人の作家について、作風の変遷を見られるのは面白い。流通している絵ばかり見ても面白くない。市民があまり見たことがないような作品を見せてほしい。

(川崎委員)：上越妙高駅にあった作品はどこに行ったのか。

(笹川統括学芸員)：ほとんど外に日本画を展示していたものだったので、痛みがひどく、簡便な修復をして、外して保管している。

(五十嵐委員)：柴田展は会期も長い、イベント数がほかの展覧会より少ない。これは観桜会が理由か。

(笹川統括学芸員)：観桜会期間になると、他のイベントが入れづらくなる。

(五十嵐委員)：柴田展ならではのイベントを、観桜会期間を外して入れたらいいのではと感じた。

(笹川統括学芸員)：ステンドグラス体験などの案もあったが、なかなか美術館でやるのは難しく、断念した。フィルムシートを使ってもできなくはないと思うが。

- (五十嵐委員)：例えばステングラスを見にいくツアーなど、面白いと思う。
- (大塚委員)：玉井力三という人は柿崎の人。ご遺族の方とも、交流がある。
- (笹川統括学芸員)：来年度展覧会で取り上げる作家は上越市出身である。多様な作家がいる。
- (大塚委員)：濱谷浩も上越出身か。
- (笹川統括学芸員)：濱谷浩は東京出身。高田陸軍の取材をするときに高田に来た。その後戦時中は高田に疎開し、齋藤三郎や小田嶽夫などとも交流した。桑取谷の小正月の様子を取材し、『雪国』という写真集を出したことで有名である。
- (大塚委員)：次々と展覧会の企画が出来て素晴らしい。
- (笹川統括学芸員)：もっと紹介しないといけない作家がたくさんいる。
- (高橋委員)：展覧会の企画だけでなく、作品も集めてこないといけない。展示する作品の見極めも重要だろう。
- (大塚委員)：展示スペースとの関係もある。いつも話題に上がるが、手狭なスペースの中で、作品の選択、展示替えの工夫もしながらやっていかなければならない。

(3) 今後の美術館の運営について (公開)

- (笹川統括学芸員)：今後の美術館の発展、新たな活用方法、展示内容など、テーマを設けずに自由に意見交換をしたいと考えている。
- (大塚委員)：グッズについて、「古径さんちの固形石けん」がとても面白く、商品の出来もよくて、家族から人気である。
- (宮越委員)：少しひねった商品がおいてあると、おもしろい美術館だなと感じる。
- (五十嵐委員)：ガチャガチャなどどうか。小さい子から大人まで楽しんでいる。
- (宮越委員)：ご当地ならではのものが入っていると人気がある。
- (川崎委員)：山梨の博物館で、出土した土器の破片を 3D プリンターで出力してガチャガチャで売っていて面白いと思った。
- (五十嵐委員)：目標としては、来館者を増やしたいということでもいいのか。どこを目指すのが重要。観光に来た外国人なのか、それとも市民なのか、それぞれ違うアプローチになるだろう。
- (高橋委員)：コロナ前と後の人々の変化が一番の関心事。本当に様々なこと、価値観も変わっていったってしまった。これからは非常に心配でもある。センス、アンテナを張ることも重要。見せ方について、今のいろんな手法を使っていいのではないか。デジタルデータも古径に関しては持っている。古径保存会の故・松井氏とも「これからはそういう時代になっていく」と 10 年以上も前だが話をしていた。年齢層、若い人たちに対する見せ方、デジタル技術をつかったようなものを考えてみたらどうか。大学と連携してもいいだろう。中学生、高校生、小学生、社会人、20 代、30 代、・・・みんな感性が違う。ものも見方も違う。
- (高橋委員)：上越市でプロジェクションマッピングの機械を買ったのに全然使ってない。春日山にスクリーンつくって春日山城を映しだせばいい。建てるのは大変だが映すくらいならできるだろう。そんなことを美術館でやってみるとか。
- (川崎委員)：今思い付きで話をするが、生成 AI に古径の絵を学習させて、古径の絵をかかせることで小林古径の書き方の癖を探す、などどうか。古径自体は古い人

だが、最新の技術を使ってちょっと若い人の心をつかむ、など。

(高橋委員) : AI の古径が画室にいたらリアルで面白い。

(五十嵐委員) : 言葉を入力するとそれにあった作品を作ってくれるとか。

(大塚委員) : 2月11日のキャンドルナイトの日に、家族、孫も連れて美術館に来た。日多くの人に来ていて、自分の居場所がないような感覚がした。こういう時に、もっと広ければいいのに、強く感じた。二ノ丸ホールで子どもが遊べるおもちゃも用意してあったと記憶していたので、小さい孫もそこで遊べるかと思ったら、カフェ営業でおもちゃがしまっていた。「美術館で遊ぼうと思ったけどなかったな、こういう人が多いときは子どもを連れてきてはいけないのだな」と感じてしまい、残念に感じた。小さな子どもにもっと親しんでもらえるようなスペース、エリアを大事にしていくことで、すそ野が広がっていくと思う。小さい頃から美術館に行くことの抵抗をなくしていく。そういう風にしていきたい。欲を言えば図書スペースなどもあるとなおさらいい。

反面、あれだけの人が気軽に美術館に足を運べる日は、市民にとっては大事なイベントの日なのだと思うし、大事にしなければならないと感じた。

(笹川統括学芸員) : キャンドルナイトについて、今年は800人を超える来館があった。

(五十嵐委員) : 1日で800人来るのはすごいことだが、全員満足して帰れたのか疑問。逆に1日にしないで、何日間か実施してもいいのではないか。

(笹川統括学芸員) : 特別感がいいのかもしれない。だからこれだけ人が来るとも考えている。

(川崎委員) : 今年は小雪だったが大丈夫だったのか。

(笹川統括学芸員) : 敷地内に雪はあったので何とかあったが、当日、点火の時間に雨が降って大変だった。

(宮越委員) : レルヒ祭も本町で雪灯籠をつくらなくしてしまったので、本町の雪のイベントは今何もない状態。町の人からも「今年はやらないのか」と声があった。

(高橋委員) : 美術館だけのテーマではない。地域の人には雪を毛嫌いする傾向がある。雪は生活にとっては邪魔者。だが雪を求めてくる人にとっては最高の土地。人口の多い地域にこれだけ雪がある、これだけ多く雪が降るところには人はふつう住まない。でもここにいる人たちは住んでいる。これが高田の歴史でもある。雪を利用するしかない。町の中にこれだけ雪があるというのが魅力。そういった意識改革が必要。観桜会まで雪を取っておいて、観桜会に来た人に遊ばせるなどしたらいいのに、と言っても誰もやろうとしない。

(川崎委員) : 観桜会の時に、美術館庭園で雪の滑り台をつくったらどうか。

(高橋委員) : 雪の高田をもっと売り出していくべき。

(宮越委員) : 雪月花に乗ってやってきた台湾の観光客も、雪が降っているだけで喜んでくださる。

(高橋委員) : 台湾だけでない、雪の降らない県の観光客だって喜ぶ。キャンドルも、雪の上にあるからいいのである。

(笹川統括学芸員) : 2月11日は必ずキャンドルナイトの日。雪灯籠をつくる、夜まで開館する、美術館が無料になる。そこに合わせて、雪を楽しみにくるお客さんにも楽しんでもらえるように発信することで人の流れが変わっていくと感じた。これ

が美術館だけでなく、外に広がっていったらいいと考えている。

(高橋委員)：この美術館が高田のことを発信していく拠点にもなる。正直、展示スペースは狭い。これは事実。しかし、上越市の文化行政はこの美術館がカギとなる。何でもいいわけでもない。美術館、そして上越市の魅力を発信してほしい。観光開発的などころも美術館職員の皆さんがやらなければならないのは難しいことかもしれないが、適切に情報発信していくことが必要だろう。

(市川主任学芸員)：意見が出尽くしたようなので、これにて終了とする。

(市川主任学芸員)：最後に笹川統括学芸員が挨拶申し上げる。

(笹川統括学芸員)：本日は貴重な意見をいただき感謝申し上げる。会議の中で「ここが上越市の文化行政・観光開発のカギになる」という話も上がり、美術館が果たす役割、使命の重さを再確認した。そうした中で委員の皆様のご意見を美術館の運営に生かしていきたいと考えている。今後とも、貴重なご意見・ご指導をいただきたくお願い申し上げる。

(終了)

8 問合せ先

小林古径記念美術館

TEL：025-523-8680

E-mail：kokei@city.joetsu.lg.jp

9 その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。